

鹿児島大学法学部 特別講義「地域づくりとNPO」(令和3年12月9日) 受講生感想

*みなさんの感想にコメントを添えています。

(公開授業受講生) ①

大倉先生の話聞きながら中学生まで過ごした鹿屋の様子を思い出しました。私が高校生の頃は、国鉄の電車が志布志まで走っていました。1980年代後半に赤字ローカル線は廃止されて、鹿屋へ行く電車もなくなり、本数の少ないバスを乗り換えながら、鹿屋まで行くようになりました。それで私は大倉先生の公共交通機関が乏しいと言われるのが、よくわかります。そういうこともあってか、私たちの年代は鹿屋から将来は出て就職しようという気持ちが、自然と頭の中にあっただけです。

今回の講演で先生の話を実際聴いて、わからなかった言葉の深い意味を感じる事ができたり、新しく覚えた言葉がありました。学生の皆さんは「おせっかい」が気になっていましたが、私もその言葉をどういう風に捉えていいのか考えていました。相手は、相談してないのに歩み寄って行かないといけないから、やっぱり「おせっかい」なんですね。先生の話の中で新しく HSP ハイリー・センシティブ・パーソンという言葉が覚えました。調べると「非常に感受性が強く敏感な気質を持った人」という意味でした。色々な生きづらさや困りごとを抱える方々がいることを知りました。

機構の人員が足りているのかなと私は思っていました。先生のお考え方は違っていました。「人材ありきで考えていたら、その人材はいない。住民主体の地域づくりにはハードが大事、いろいろな人が立ち寄れる場所をつくる。そこを構成する人は専門家じゃなくても共感してくれる人でいい。観察する・対話すること2つができればいい。専門的な知識があるから観察できるわけではない、たくさん目の届いて気づきがある」といった事を先生は、述べられていました。私は福祉施設や病院で働いていたので、看護師や相談員の人員の配置基準に捉われていましたが、そこまで難しく考えなくてもいいのかなと思えました。

今回の講演を聴いているうちに、先生の特徴的な話し方や雰囲気先生の人柄がみえて、気持ちがどんどん引き込まれていく感じがしました。人と接する時の話しやすい環境づくりも大事だなと思いました。

鹿屋にお住まいの頃がおありになられたのですね。時代と共に便利になること、便・不便は関係なく淘汰されてしまうこと、そこに予期せぬ事態、、私たちはその時代、その地域でどの様に順応していかなければならないか、、本当に難しいですね。だからこそ、頼る人や場所が法・制度や専門家によるものではなく、住民主体のハードが生きてくると考えています。

また、病院や福祉施設には絶対数の専門的人材が必要ですが、すべての業務をその人材が担わなくてはならないかというところではありません。簡単に議論できる問題ではありませんが、利用者さん主体で考えたとき、これまでと違った人員配置の在り方が見えてくるかもしれませんね。

(公開授業受講生) ②

20才の時の阪神淡路大震災で友人を15人亡くされ、社会の混乱を目の当たりにしたのが、活動の原点だったとのことである。その時の思いで、その後の人生を切り開いてきておられるということに感銘した。ご自身の震災時の経験、建築業や労働組合での職業体験から、被災者やホームレスなど生活困窮者への支援という面での活動に向かわれたとのこと、現在の行政支援などの先駆的な仕事をされてこられたことが素晴らしいと思った。ただ、現実にはなかなか大変なことの連続だ

ったのではとも思った。

京都から鹿児島の大隅地区に活動の場を移されたと聞き、最初はなぜこんな過疎の地に、という疑問を感じていたが、お話を伺ううちに納得できた。交通機関も不十分、人材もなかなかいないという中で、だからこそ弱い人を支援することが必要だということで、この地で立ち上げられたとのこと。ご自身の人脈、企業や団体とのつながり、営業活動など・・・エネルギーな活動により、事業を軌道に乗せられていることに感銘した。

「おせっかい」という姿勢での活動を基本にされている。社会的に支援を必要とする人はなかなか自分から、相談したり働きかけたりすることは難しい。そこに、迷惑がられても、微妙な距離感で「おせっかい」を出すことが問題解決の糸口になるということだ。これをきっかけに人間関係が構築できれば、そこから行政の支援や社会へのつながりを作れるのだろう。当事者との関係性を作り出すことが、一番大事ということだったが、なるほどと思う。行政などの社会の仕組みとの間の隙間を埋めるという位置づけになる。

「おせっかい」の最初のきっかけづくりには、営業活動も大事だとのことだった。メディアなどでも取り上げられてきているようだが、ますます認知度が上がり、人的な面や資金的な面でも支援の輪が広がることを期待したい。

どこの地域にもそれぞれの地域課題があり、それを「我が事」と捉える方が行政や公的機関、そして、地域住民の中にどれだけいるのか。いたとしても、誰が声を上げ、旗を振り、行動に移すのか。「おせっかい」は民間だからできるのか。公的機関はしてはいけないのか。「地域共生」とは行政が仕掛けるものなのか。地域住民が主体となって仕掛けてもいいのか。

すべての人が「我が事」と捉えることで、自ずと答えが見えそうな気がしますね。

①

今回、大倉さんにお話を伺って、疑問として挙げていた「活動を始めるきっかけ」について知ることができた。大倉さんにとって阪神淡路大震災がきっかけになったことから、様々な制度や法律ができたことから、阪神淡路大震災は日本のボランティア活動にとって大きな影響を与えたことが改めて分かった。そして今回、今まで自分にはなかった考え方を学ぶことができた。特に、自発性パラドックスに陥ることはないのか、支援を拒まれた際はどのようにしているのかと多くの学生が疑問に思っていたこれらに対するお答えがとても印象に残っている。自発性パラドックスに陥る理由は、常に一人称で物事を考えるからであって、全ての福祉活動には、必ず「誰か」を意識するというお話があった。私はこれまで、自分が動けば誰かのためになるという思いから自発的に始めたことが、結果として自分に余裕をなくさせてしまっていたという経験がある。”なんで私が、なんで私ばかり…”という気持ちが大きくなって苦しくなっていたが、ここでは「誰か」のためになっているという意識が薄れてしまっていたように感じる。このことから、何か行動する際は、”自分の行動が「誰か」に良い影響を与えられているのかもしれない”と、人を思う気持ちを忘れないようにしたい。そして、人生のストーリーの新たな登場人物になるためのきっかけとしてのおせっかいという考えで支援を行われていると学んだ今、私もこのようなマインドでまずは周りで困っている人に対して接するようになりたいと思った。また、私自身、人と会うことで良い刺激や元気を貰えるため、人との関係作りをこれからも積極的に行おうと改めて思えた時間であった。

ボランティア含む福祉活動や誰かとの関わりの中には、絶対に誰かの「犠牲」が伴ってはいけないと私は考えています。そうでないと、良い関係づくりはできません。あなたの言う、良い刺激や

元気を貰うことはできないし、誰かにも良い影響を与えることはできないでしょう。無理ない範囲で、距離感や今の自分の裁量を見極めながら誰かとの関わりを重ねることが、あなたの成長につながることでしょう。

②

今回、大倉さんのお話を聞き、学生時代に経験された阪神淡路大震災と、復興の過程で目の当たりにした、制度だけでは保護しきれない困難を抱えた人々の様子などが、現在の活動につながるきっかけとなったことを知った。この経験を通して、就職後もホームレス支援を続けたり、中間管理職として高い立場にいるよりも末端社員を助けたいと考え、労働組合に入ったりと、大倉さんは、どこにいても、常に周りの人や環境に目を向け、社会に対する問題意識を持っていらっしやっただと思った。大倉さんのお話を聞きながら、ボランティアは自分の好きなことや興味のあることだけでなく、その人の社会の捉え方や課題意識から始まるものでもあるのだと感じた。

また、現在の活動に関して伺う中で、「支援は難しくない」とおっしゃっていたことが印象的だった。私自身、不登校や引きこもりと聞くと、接し方や関わり方が難しそうだというイメージが大きかった。しかし大倉さんの、「その人の人生の新しい登場人物にならないといけない。本人が諦めていてもこっちが諦めない。」という言葉はとても心に響いた。困難を抱える人に寄り添い、一緒に考える存在になることは、必ずしも特別なスキルを持つ人だけができるわけではなく、自分にも何かできるのではないかと感じられた言葉だった。これまでの固定概念だけで引きこもりや不登校の人と距離を取るのではなく、自分にできることは何だろうという観点で考えることの大切さを学べた。

そして、支援をする上で、利用者はもちろん、スタッフにも学ぶ機会を作ったり、働き方に関して相談に乗ったりと、細かい配慮をしながらチームワークを大切にされている印象を受けた。勉強すべき内容を強要するのではなく、それぞれが広い視野を持って関心を持ったことに自らチャレンジできる環境があることは、利用者にとってもスタッフにとっても自分らしく成長するきっかけになると思った。

今回、実践的な活動をされている大倉さんのお話を聞くことができ、これまでの講義で学んできたことも踏まえながら、よりボランティアや支え合う地域づくりについて考えを深められたと思う。大倉さんのお話を通して初めて得られた知識もあったため、とても有意義な時間を過ごすことができた。

私自身、ホームレス支援を通じて知り合ったホームレスのおっちゃんやおばちゃんに、本当に多くの励ましを貰ったし、人生について勉強もさせて貰いました。その様な皆さんも、私にとって、とても大切な人生ストーリーの登場人物なのです。お互いがお互いの人生に登場する中で、お互いに大切と思える関係性をつくることは、なかなか簡単にはいかないかもしれません。でも、その関係性をつくることができれば、そこから始まる支援というのはそんなに難しくはないのですよ。

きっと、こういったことは、友だちや職場の仲間とのことでも当てはまると思います。これから社会に出たら、そのようなことを意識されてみてください。

③

まず、団体発足の原点となる大震災の経験が衝撃的だった。そして、自立についての問題点を公共交通機関から考えているのが画期的で素敵な考え方だと思った。私の住む地域も車がなければバイト先にも行くことができないので、この点には納得でき、お金がないのにもかかわらず働きに行

けないような地域に住んでいる人は将来への不安を抱えることも多くなるのではないかと推測できる。着眼点がすごいと思った。また、私が一番気になっていたおせっかい訪問の件に関しては、引きこもりの方は初めから相談者ではないという考え方に対して興味深く思った。関係性の構築のためにおせっかい訪問しか方法がないとおっしゃっていたのが印象的で、本音を聞いてから支援者という立場になれるという考え方は、長い目で引きこもりの方を支援しようという意思が伝わってくる。ボランティアをするときにできるだけ多くの人を助けることも大事だが、一人一人に対する質を高めること、具体的には就職するまでサポートをするなどの心掛けが必要だと感じた。その際に自発性パラドックスに陥らないために、物事を一人で考えてはいけないことが分かり勉強になった。誰かを意識することでボランティアも楽になることが印象的だった。補足情報で、たくさんの職員を雇用し、休みを取りやすくしている点が良い点だと思った。私のバイト先では人が足りなくて休みも取りづらく、それが原因でやめたくなっているので、長期的に働けるスタッフを確保するための工夫が素晴らしいと思った。長期的に働くことで、スキルを身につけたスタッフが育っていくのではないかと考えた。

社会課題について考える際には、マクロ・メゾ・ミクロと様々な視点で捉えることが大切です。個を見ることも、全体を捉えることも、客観的な立場から考えることも、地域住民当事者として考えてみることも全て大切です。例えば、公園の掃除のボランティアがあったとします。落ち葉や木の実1つ残らず掃除するのは、公園が綺麗になっていいかもしれません。だけど、工作のために落ち葉やドングリを探しに来た小さな子どもがいたとしたら、どのような気持ちになるでしょう。遊び心やゆとりを持った想像力が、自発性パラドックスに陥らないための秘訣だったりもしますよ。

④

資料を読んだ際に、手厚すぎる支援を受けた児童は自立できるのかという少し批判的な考えを持ったが、実際に不登校だった児童の事例が取り上げられており、自分自身で進んで学校の準備もするようになったとのことから、資料を読み主観的に捉えるだけでなく話を実際に聞くことの重要性を感じた。また社会復帰できる人も多いようだったため、各自治体に組織が置けるのが一番理想的だと思った。

私たちも、中学校区に1つくらい、私たちのような小規模多機能施設ができて欲しいと願っており、団体設立の応援を積極的にさせていただきます。学生の方でも大歓迎ですよ。

⑤

今回の大倉さんの講義を通して、相談者との関係性の構築に関する話題が、非常に印象に残っている。私は今まで「支援する」といった言葉を多く使ってきたが、引きこもりやニートの方の全員が決して支援を望んでいる訳では無いことを忘れてしまっていた。ゆっくりと時間をかけながら相手に寄り添う「おせっかい」を続けることが大切であり、その過程を踏んでから、ようやく相談者と支援者といった関係性が構築されると理解することができた。

また、相談者の中には、身近な人にほど相談しにくい問題を抱える人も多いことを知り、そのような方に寄り添えるような環境を整えていく必要性も感じた。第三者だからこそ話せる悩みやデリケートな問題などに対しても根気強く「おせっかい」を続けることで、相談者が心を開けるような関係を作り上げていくことが大切なのだなどと改めて感じた。

「おせっかい」とは本来、「でしゃばり、要らぬお世話、不必要に立ち入ること」といったような

意味合いを持っています。でも、ここで私の話す「おせっかい」は、「相手にとって良いことをしている」という意味を含んでいるのかというと決してそうではありません。本来の意味そのままなのです。仮に、良いことをしているとのおいで相手に働きかけているとします。もし、何度も何度も働きかけても、相手の言動が自分の思い通りの結果にならなければ、あなたはどのような気持ちになるでしょうか？ もし、毎度、相手に罵声を浴びせられたら？「せっかく相手のためと思ってやってるのに、」「そんなこと言われるなら相手にしないでおこう、」なんていう考えが頭によぎるかもしれません。「おせっかい」とは本来の意味の通り「でしゃばり、要らぬお世話、不必要に立ち入ること」であるということ常を胸に留めておくことが大切です。「だから、思い通りにいかなくて当たり前」なのだ。それじゃあどのように「おせっかい」を続けるのか。私は「理念と信念」があれば可能だと考えています。

⑥

ボランティア活動となると支援する側支援される側に分かれてしまい支援する側が偉いという立場のように感じてしまいました。ですが、そのような考えは邪道だと思いました。

他人に心を開くことができない人に対しておせっかいを続けて関係の構築が必要だということが分かりました。他人に心を傷つけられてしまった対象者に対しておせっかいを続けて人をもう一度信じてもらうことは簡単ではない分対象者に与える影響が多いのだらうと思いました。行政が介入できない部分に介入できるのが民間やNPOの強みだと再確認しました。たらいまわしにされてしまう現状や担当する人間が他人行儀であることが相談者やその家族を苦しめているということが分かりました。やる気や思いやりの心が必要だと思いました。自分も居場所を見つけられず誰にも相談できない経験があるのでこのような活動に興味を抱きました。

時代の流れに加え、新型コロナウイルス感染拡大防止措置によって、ますます「血縁・地縁・社縁」の3つの縁が希薄になり、孤独・孤立状態になられている方は非常に増えています。「女性の自殺者数増加」というニュースを観られたと思いますが、けっして失業などで収入が減ったということだけがその要因ではなく、もしかすると、失業によって唯一のつながりであった縁が途切れてしまったのかもしれない。「誰かにいつでも相談できる社会」を目指したいですね。

⑦

大倉さんのお話を聞いて、何度も気づかされ何度も「なるほど」と思いました。すべての言葉が腑に落ちてすごいなと一言でまとめてしまうのが物足りないほどのお話を聞くことができました。

なぜ大隅を拠点としたのかという話題がまず印象的でした。大隅に来られてから「公共交通機関の少なさ」が課題であることにきづき、役所の方に尋ねたとのことでした。地元でないからこそ、その地域で感じる違和感や課題があるのだと思いました。また、そのやり取りの中で対象者となる方をお迎えに上がれないのが課題だといって悩み続けるのではなく、だったら大隅ならではの仕組みの構造を図ることが重要なのではないかと思ひ組織を大隅で立ち上げたとのことでした。前例がないことであるとリスクが伴うため、行政の方は新しいことに対してすぐに取り組めないのは十分理解できます。ですがそこでいかにして地域に寄り添った形で取り組みを行うかによって、地域がどう活性化するかあるいは過疎化が深刻化するのかが変わっていくのだらうと思いました。課題を忌み嫌うのではなく、新しいことを始めるチャンスだと全体で意識を変えていくことが大切だと感じました。

また復学がゴールではないという考え方も印象的でした。引きこもりの方や学校にどうしても通えない方の支援となると最終的なゴールは学校に通えるようになることだと思いがちですが、PS支援機構さんはそうではありませんでした。生徒さんたちの進路を聞いてみると、働く子や復学している子もいれば、戻ってきた子もいるとのことでした。ですがどれも最終的なゴールとはしていませんでした。就職したからもうおしまいではなく、就職した後も、常に寄り添っていました。「支援」という枠組みではなく、親のような存在として一人一人の人生のサポートを行っているので、生徒さんたちも安心して多様な道を選択できているのだらうと思いました。

一人の人として普通に接するといういい脱力感や構えていないおせっかいが、生徒さんにとって心のよりどころとなり、時間がたつにつれて「自分として」接することが可能になることにつながっているのだと思いました。

常に1人称で物事を考えずに対象となる「相手」を意識するということは大崎町のワークショップを行う際にしっかり心にとめて今後準備を進めていこうと思います。

例えば、リーマンショックや大災害、そして、この度の新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態など誰が予測できたでしょうか。その中でも、なんとかこうして事態を乗り越えることができているのも国や自治体の法・制度があってこそだと考えています。そこが一定しっかりしているからこそ、私たち民間団体の役割が見えてくるのだとも考えています。産官学民がうまく連携できるよう、お互いを批判するのではなく、理解し合い、一緒に前を進んでいけば、より良い地域社会になると信じています。

⑧

大倉さんのお話を聴き、PS支援機構について理解を深めることが出来た。

冒頭の、そもそもどうしてこの活動を？という質問からは、大倉さんが「おせっかい」にこだわる理由や、引きこもりや不登校に着目するきっかけとなったバックグラウンドを垣間見ることができた。私は幸いにも、大震災で友人や家族を亡くすという経験をしたことがないため、お話を聴いていて心がずんと重くなるような感じがした。

印象的だったのは、ソフト面(人材集め)からハード面(住民主体の地域づくり)へと着眼点をシフトし、誰もが気軽に集える地域を目指した部分だった。人材育成に関してはあまり躍起にならず、支援をする側の個性も大切になさっているのが伝わってきた。「尊厳と権利の回復」「観察と対話」など、印象深い言葉がたくさん出てきて、とても勉強になった。

余談だが、鹿屋で活動を始めるきっかけとして鹿児島県の交通の便の悪さのお話もあった。(電車やバスの本数が限られていて、車が無いと生活できないという内容だったと思う。)現在、他の講義で鹿児島県の公共交通機関に対する財源不足や赤字に関して学んでいたため、交通の便に関してもとても考えさせられた。私たちはバスや電車が無くても、車があればいいやと考えてしまうが、本当に移動手段がない人にとってこのような状態は不便極まりないと感じる。高齢者や障害をもつ方々にとって公共交通機関はもっと発展させるべきではないかと考えていたのだが、引きこもりや不登校などの方々にとっても交通の便があるか無いかでは随分と生活が変わるのではないかと感じた。

今回のお話を参考に、今後の講義も意欲的に取り組んでいきたい。

予期せぬ形でご友人やご家族、恋人など大切な方を失うという経験は、出来ればして欲しくないと願っています。しかし、今日明日何が起こるか分からない、明日は我が身かもしれない、などということは常に頭の片隅に置いておき、起こっては欲しくないけれども、それを予測したり、準備

しなければならないのが、未曾有のこのご時世です。「この地域のこの状況で、そのまま〇年経てばきつと～～な社会になってしまう」などという想像の積み重ねが、私たちが活動する上での土台になっているのかもしれない。

⑨

人材を確保することは大変であり、人材ありきでの視点を切り換え、住民主体での地域づくりのためにいろんな人が立ち寄れるハードが必要ということであったが、各地域にある公民館などの社会教育施設がある。関係性を大事にできる居場所として既存の社会教育施設を活用することが求められるのではないかと感じた。

私がボランティアを行った時に相手はここまでのことを求めているのではないかとためらい行動をしなかったことがあるが、支援する人のストーリーの新たな登場人物になるきっかけを逃してしまっていたと気づけた。もっと深くかかわるべきであったと感じた。

私は公務員になろうと考えていたが、私のやりたいことは公務員としての仕事ではできないような気がしてきた。

想像してみてください。あなたの知っている公民館は、ふらっと立ち寄りたくなるようなところですか？ 学習センターなどの社会教育施設は身近なところにありますか？ 自助や公助はもちろん大切ですが、自らの力でなんとか出来なければ自己責任、、大きな声では言えませんが、公的機関は本当に頼りにできるのか、、そんな中で、共助の必要性を皆さんで考えていただきたいと思います。すると、公務員だから出来る、、民間だから出来る、、というのではなく、「公務員として、こんなことをやりたい！」ということが見えてきますよ。

⑩

私が印象に残った点は、大倉さんがボランティア活動に参加したきっかけとして、阪神淡路大震災のときに、問題を自分事として捉えることができた点である。私は、様々な問題を自分事として捉えることができていない。そのため、様々なボランティア活動に参加し、多様な人々の声を聞くことで、その人々が抱える困難を知り、問題を自分事として捉えようと思った。

また、PS 支援機構がハードの整備に注力している点には、私が無意識のうちに公共活動を行政の専管事項と認識していたことに気づかされた。私は、費用のかかるハードの整備は行政の仕事で、民間は主にソフト面の支援に従事するものだと考えていた。しかし、今回の話を聞き、このような2層構造で公共事業を捉えていたことを反省した。初期投資は個人負担であるものの、共感する仲間を募り、出資金を得て事業を黒字化することで、持続的な経営にしている事例を知ることができ、民間による公共事業は多様であることを学んだ。

最後に、研修を強要しない点は、組織運営で重要なことだと思った。職員ができる範囲で役割分担することで、負担が少なくなり、仲間を募りやすいと思った。そして、職員の自発的な学びを尊重し、適した本や研修を紹介する点は、私が組織運営する際に見習おうと思った。このことを実現するために、学び続けようと思った。

今の世の中の様々な問題をすべて自分事として捉えることは難しいかもしれませんが、まずは身近なところから、自ら歩み寄ることで自然と自分事として考えることができるでしょう。歩み寄る際には事前に知識をつけるなどの準備は要りません。その場に自分の身を置いて、そこにいる人の表情や動きを観察し、声を聴き、空気を感じてください。すると、今までのあなたの経験を踏まえ

て、自ずとあなたなりの考えが思い浮かぶはずで。

組織をつくる時も同じです。メンバーが集えば、まずはそのメンバー自らがこの組織やその現場でどのように感じ、考えることが出来るのかを尊重します。あなたと同じかもしれませんが、違うかもしれません。いずれにせよ尊重することが大切です。するとメンバーは自分事としてあらゆる事に取り組むことでしょう。そうすると成長も期待できますし、想定外の組織の発展にも繋がることもあります。今あげたのは組織づくりの考えの一部ですが、「ティール組織」というのがありますので勉強されてみてもいいかもしれませんよ。

⑪

私はこれまで不登校や引きこもりになる学生は特別な事情や悩みを抱えていると決めつけ、私のような知識も無く人生経験も浅い人間が悩みや困難と一緒に考えることは難しいと考えていた。しかし、大倉さんの『本来は身近な人に相談できる内容だけど、社会的孤立や孤独化により誰にも相談できなくなっている』という言葉聞いて私たちと生活や家庭環境が異なるだけで実は同じ悩みを抱えているのかもしれないと気づき、大切なのは専門性よりも関係性を回復し一人の人間として自分を認める姿勢を取り戻すことなのではないかと考えた。そのために関わり方の一つの方法として支援側のおせっかいがあり、生活や家庭環境で作られてしまった孤独や孤立の状況から脱出し、自分の考えを一番大切にできる尊厳の回復、自分の人生を自身の選択で組み立てるための権利の回復につなげるという意義があることを学んだ。

このような支援の体制に加えて支援の在り方の側面も考える必要があると理解した。大倉さんがおっしゃったようにソフト面も大事だが、誰もが利用しやすく色んな人が立ち寄れる場所づくりのハード面を意識して地域や住民主体の支援を作る必要性も学んだ。

近年、居場所の重要性についてあらためて議論されています。一時期は、リアルにつながりが減少する一方でインターネットの世界でのつながりを持っているという人は増加していました。しかし、2016年からの統計「子供・若者育成支援推進大綱」ではリアルと同様に年々減少し、どこにも居場所が無いという人が増加しているという状態となっています。同大綱では、自己肯定感・今の充実感・将来への希望・社会貢献の意欲・チャレンジ精神といった自己認識は居場所の数と密接な関係にあり、自分にとっての居場所の数が多いほどそれらが高くなっていると統計をもとに明示しています。一方で、自分にとっての居場所が少ない人ほど支援機関の利用や他者への相談を希望しないと明示しています。これらを踏まえてみても、居場所というハード面は様々な人が自由に選択できるように多種多様で多ければ多いほどよいのではないかと思います。

⑫

大倉さんのお話を聞いて、困っている人のために動く行動力と他人のために尽くしている姿に感動した。また、寛容な心を持っていることに人として尊敬できると思った。

“おせっかい”という単語がたくさん出てきたが、親切心を持つことや人との関係を持つための第一歩は“おせっかい”であることを学んだ。時間をかけてもいいから、その人の関係性を大事にできる居場所（ハード）をまずは作ってあげるのが支援をする上で大事なんだなと思った。また、尊厳の回復、権利の回復という明確な目標を掲げているのがかっこいいと思ったし、だからこそ、施設を利用している人が安心できるのだろうと思った。

引きこもりや不登校になってしまった人や生まれながらに生きづらさを抱えている人ってなん

でいるのだろうと考えた時、助けている人が身近になくて孤独だからなんだ、ということに改めて気付かされた。私は、その孤独さに寄り添い、声をかけてあげられるような優しい人間になりたい。これから、社会人になって、困っている人をみかけたら、どのようにしたら関係性を持てる居場所を作ってあげられるのだろう？ということのを第一に考えて、その人の状況を観察して対話をしていって、“おせっかい”をしていこうと思った。

百聞は一見にしかずということで、今度、時間があったら PS 支援機構さんの方に伺って、実際の建物や施設の1日の様子を見学したり、施設の方のお話を聞いたりして勉強したい。実をいうと、子どもや若者の支援というのを将来、やりたいなと思っていたので今回のお話はとても心にくるものがあった。必ず見学に行ってみようと思いました。

第一歩として、まずはあなた自身が誰かの居場所になってあげられるといいですね。人は誰かとの関わりの中でこそ自分自身を知ることができます。孤独や社会的孤立によって自分の存在意義などを認識することが難しくなり、生きる意欲や働く意欲が低下してしまいます。おせっかいはその時点では迷惑なことかもしれませんが、その迷惑が自分自身のことを振り返るきっかけになることもあると考えています。

⑬

私はきっかけがとても印象に残った。阪神・淡路大震災で悲惨な現場を見て、助けたいという気持ちから大倉さんは行動に出たとおっしゃっていて、やはりボランティアを行う人たちの行動力には関心してしまう。自分なら周りを見ることが出来ず、家族や友達の心配ばかりして、全く知らない赤の他人の心配なんて出来ないだろう。現代はボランティア活動もだいぶ浸透し、災害などがあると県外からも多数の人達が来てくれたりする。また、少し話がズレるかもしれないがリオオリンピックのとき会場に残ってゴミを拾う日本人のサポーターたちなど、多くの人たちが人を助けたいという気持ちを持ち、行動に移している。これらのことが浸透した理由としては文化の発達等もあるかもしれないが大倉さんたちのような阪神・淡路大震災などでの状況を見て、助けてあげようとしてた人たちがいたからではないかと思った。私はこのような人たちのために飲み物やお弁当などの資金として税金を使って欲しいと強く思った。

世界各地には様々なボランティア活動をされている方々がおられますよね。私たちも本当に頭の下がる思いです。きっと、そういった皆さんは、「自分たちの活動のために税金は使わないで！」とおっしゃるかもしれませんがね。もし、ボランティアというものに関心があるのなら、まずは、身近な地域課題に目を向けてみてください。そして、その地域課題に取り組む団体さん等と直接話す機会をつくられてみてください。税金の使い途、国や自治体の予算についてなど、きっと関心をもっと深まりますよ。

⑭

大倉さんのお話を伺い、疑問として挙げていた「おせっかい」について、そして「おせっかい以外に何もない」という話がとても印象に残った。引きこもっている人とそうでない人の違いは孤立や孤独を感じているかどうかであり、これは私にもいずれ当てはまる可能性があることを感じた。私は今地元で実家暮らしであり、常に人と触れあう機会はあるが、いずれ就職・一人暮らしをするため、そうすると人と会う機会が減る。もともとネガティブ思考で寂しがりやな私はその環境に耐えられないと思う。大倉さんの「ふらっと」にくる人々は少なくともこのような環境で孤立・孤独

を感じ、人と関わることも怖くなってしまった人も中にはいるだろう。そこで「おせっかい」によってこちらから関わろうとすること、歩み寄ろうとすることは、孤立・孤独を解消することにつながる。「専門性より関係性」はまさにこのことだと感じた。

すでに、公的機関の中でも「申請主義・契約主義での窓口支援や施設内支援だけでは限界がある」と言われています。しかし、アウトリーチ(訪問)による勝手なおせっかいから関係性を構築することはなかなか難しく、アウトリーチをしたからといって必ずしも解決につながるというわけではありません。それでも、アウトリーチでしかその方の物語に登場させていただくことができないのですよ。

先日、ひきこもり状態が約20年という1人暮らしの男性(30代後半)宅に訪問しました。数ヶ月も風呂には入らず、髪の毛はボサボサで体臭がキツく、ツメもヒゲも伸びっぱなしでした。少しお話をして、といっても男性は返事だけで、最後に、「来週も来てもいいですか？」の問いに「うん」とだけ返事を聞いて、その日は帰りました。そして次の訪問。男性は留守されていて会えませんでした。部屋は掃除され、空気の入換え中でした。その日の夜、ご家族の方から男性の様子を聞くと、「部屋の片づけだけでなく、風呂に入り、ヒゲを剃っていた」とのことでした。

もしかすると、男性の物語の登場人物として私たちがキャスティングしてもらえたのかもしれない。次回、大好きな甘めのコーヒーを手土産に訪問するのが楽しみです。

⑮

改めて「おせっかい」には辞書的な意味と世間一般的なイメージでネガティブな意味が持たれているが、それだけではない良い「おせっかい」を知ることが出来た。人と関わるが出来なくなった人、難しくなった人にとっては必要な「おせっかい」であり、救われている人がいる。私にも不登校の友達がいたが、もしこのような場所知っており「おせっかい」が出来れば、学校へ同じように通えたかもしれない。もっと多くの人にこのような活動や場所があることを知ってほしいと感じる。

※先日の大崎町WS後、昼食の時に中野さんがたくさんお話を聞かせてくださった。その中でも「おせっかい」というワードが出てきた。共通ではないかもしれないが大倉さんや中野さんは常に「だれか」を意識していた。それがとても難しいことであることをWSの内容を考える際に痛感したため、とてもリスペクトしている。

大切なのは「おせっかい」をすることよりも、「課題や問題を共有する」ということです。他人事にせず我が事と捉えることの出来る人たちが集まれば、「おせっかい」などせずとも課題や問題は必ず解決につながります。しかしながら、我が事だけで精一杯なのは仕方ないこのご時世です。我が事と捉えることの出来る人たちを身近に見つけることは、なかなか難しかったりします。でも、最近はずごく便利になったSNSやオンラインシステム、クラウドファンディングなどといったツールで仲間や協賛者集めが可能な時代でもあるので、何事も視野を広く持って取り組んでいってくださいね。

⑯

今回のお話は大変興味深く、たくさんの学びを得ることができた。初めの阪神淡路大震災のお話からとても衝撃的だったのだが、大倉さんが経験されてきたお仕事やボランティアの中で感じる歯がゆさというものが今の活動へとつながっていることを知ることができた。そのような経験から自

分で実際に行動を起こし、必要な資格を得る事や、学習を怠らない点、また、私が考えていた以上に一人一人に向き合った支援というものにも大変感銘を受けた。特に今回の講義では、「関係性」というものと「おせっかい」というワードが印象に残った。お話を聞く前の段階では、専門性の高い職員が多少強引にでもお話を聞くことが「おせっかい」で、余計なことをしてでも支援をするというような印象を持っていた。しかし、お話を聞く中で大倉さんの言う「おせっかい」や支援はそうではなく、学校へ行かせることを目的としない、居場所をつくるための、関係性の構築のためにある「おせっかい」なのだとの認識を改めることができた。講義であったまづは部屋の掃除をすることや毎日外へ連れ出すこと、それを行うことで事前に準備をするようになったという変化に気付くことなどはとても重要であるように感じた。私はどうしても支援をしている、受けているという立場から考えてしまっていたことに気付くことができた。話を聞くまでに構築されていない信頼関係、何かを強制したり、話を聞いてあげているというような姿勢になっていないか、知らず知らずのうちに自分は上から目線だったのだと反省した。学校へ行けない、就職に困っている人に対して自分とは違う、どこが問題なのかと考えるのではなく、その人はどういう人なのかまづは関係を築き、居場所をつくるのが大事なのだ学び、そのための「おせっかい」はとても安心感を与えているように感じた。強制するのではない、迷惑をかけるまでしない、いつでもきていいよ、こっちにおいでよというような優しい「おせっかい」は心を開くことにもつながるのではないかと考えた。また、大倉さんの話し方がとても優しくそんな雰囲気を受講しながらもっと話してみたい、他の視点からも学びを得てみたいと感じた。最後に話されていた交通の問題についても確かにそのとおりであり、支援機構のような訪問の形での支援や自分の落ち着ける居場所が近くにあることは今後、生きづらさを抱える人にとって必要な支援なのだとして強く感じた。

多くの不登校児童やひきこもりの方にとって、誰かに何かを提案されることは「恐怖」と捉えてしまうことがあります。他者との関わりが少なかったり、外に出て何かを経験する機会がほとんど無かったために、それが支援というものとしても、提案されたことを想像することは困難で、想像できないからこそ恐怖してしまいます。だから私たちは、おせっかいをしてでもまづは見てもらい、知ってもらおうことをしています。このような方たちにとって、どんな素晴らしい提案でも見たことも聞いたこともないことだと恐怖にしかありませんが、「見たことはあるけど、聞いたことはあるけど、」ということであれば、それは恐怖ではなく「不安」となります。そこが大事で、不安に感じることにについては準備したり、策を講じたりすることが出来るのです。つまり、支援につながるということです。「おせっかい」も質と内容次第ということですね。

⑰

今回の授業で大倉さんのお話を聞き、不登校や引きこもり状態の人々に対する支援は、社会になくはならないものだと感じた。不登校や引きこもり状態の人々は様々な原因によって不登校や引きこもり状態になってしまっているため、その人々が社会に復帰できる環境を整えることかこれからの社会には必要だと考えた。そのためにも、PS 支援機構のような活動を行っている団体があるということが多くの人に知られるべきだと考えた。

困ってる人や悩んでいる人ほど情報を得ることが困難だったりします。今の時代、便利なツールはたくさんありますが、「その様な制度があるなんて知らなかった、」という方はまだまだおられます。また、自ら SOS を発信できない方もおられ、痩せ細り、ライフラインは止められた状態で発見されたというケースもあります。中には、ご両親が残してくれた銀行預金をご両親が亡くなられ

てから手つかずだったというケースも。なので、私たちの活動だけでなく、制度や社会資源をどのようにして支援が必要な方へ周知していくかを、私たちも常に考えています。

⑱

大倉さんの話を聞くまで、「おせっかい」をどのように自分の中でとらえればいいのか分からなかったが、お話を聞いて十分理解することが出来、非常に納得した。孤独な思いをしている人、地域社会の中で孤立させないために一生懸命に取り組んでいる姿に感動した。将来について迷っているが、自分が人のために何が出来るかを考えようと思う大きなきっかけになった。

人のために考えるにあたって、その人は何を求めているかを考えます。人が求めていることをすることは「おせっかい」とは言いません。「おせっかい」には、「本当にその人のためになるのだろうか？」という葛藤がつきまといます。求められたことをするのか、求められなくてもするのか、これから進む道によって変わってきますね。

⑲

PS 支援機構は利用者にとっても寄り添っているのでスタッフの方々は大変なのではないかと講義を受ける前は考えていました。しかし大倉さんのお話を聞いて、スタッフの方々のケアや働く環境を整えていて、私はPS 支援機構は働きやすい環境だと感じました。スタッフ、利用者どちらも考えられている会社で将来働きたいと思いました。

私たちの業務量はとても多いと思いますが、無駄な業務はほとんどありません。スタッフが「なんのためにこの作業をするのだろう、、」と思わせるような業務がない代わりに、自分たちが必要と感じたことはスタッフ間で話し合い、積極的にこなさせていただいています。きっと、そこに働き甲斐を感じていただいているのではないのでしょうか？ そういった関係性が自然と働きやすい環境をつくってるのであれば嬉しいです。

⑳

阪神淡路大震災の後の復興では日本の貧困層への行政の対応の不十分さが現代社会において課題であることが浮き彫りとなった。行政だけに任せるのではなく、NPOや民間全体で支援していくことが重要だと考えた。「孤独・孤立」を普段から感じているかが不登校・引きこもりの人とそうでない人の違いという説明があった。一度、日本は引きこもりになるとなかなか再び社会に戻ることは難しいように感じる。これは貧困においてもいえることだ。支援制度を知る方法がなかったり、支援サポートセンターのシステムを知らない人も多い。日本は支援が希薄化しているが十分に制度が存在している現状はある。当事者の方が外の社会と触れ合うためには「おせっかい」が求められると考えた。地域社会での小さな声掛けを実施していくことで社会における「孤立・孤独」を減らしていける。行政だけでなく、一人一人が心がけていくことが予防策となるのではないだろうか。

このご時世、さらに「無縁社会化」が進むと考えています。当事者の方は人や地域とのつながりがあるからこそ、成長や課題解決があると考えています。孤独・孤立状態でなかなかそれは期待できません。人や地域とのつながりをコーディネートすることが大切と考え、そういった活動を私たちはしていますが、本来その役割をどこの機関が責任持って担ってくださるのでしょいかね。ハードがあっても、そこに自らつながることが困難な方はたくさんおられます。

②1

大倉さんの話の中で「おせっかい」という言葉が頻繁に出てきたことが最も印象に残っている。自分の地元でもない場所で活動することを「おせっかい」と言う人もいるが、そのような活動は「おせっかい」から始まるということに納得した。

大倉さんの現在の活動に至るまでの経緯や、これまでの経験を聞いたが、「阪神淡路大震災という経験からあらゆる法律や制度ができたことを通して自分の学んだことを活かすために鹿児島に来た」ということであった。交通の便が悪いことや、人材が集まらないなどの問題の多い大隅地区において、大倉さんは、「専門性よりも関係性を大事にできる居場所づくり」、「人材育成よりも住民主体の地域づくり」を目的として活動をしているということだった。もし自分が大隅地区で活動をするならば交通の便が悪いからどうしたらよくなるか、人材が集まらないからどうしたら集まるか、というように問題解決から先に重点をおくと考える。今回の大倉さんの話を聞いて、自分とは異なる視点・捉え方があると改めて考えさせられた。

物事にはあらゆる視点・捉え方があり、それらはある時点でのベストはあっても、絶対的・永久的な正解は存在しません。なので、常に物事は多角的に捉え、能動的に考える事が大切です。今の自分に持ち合わせてる知識や経験だけでなく、仲間や先生、他分野・他業種の方たちとの交流の中から新たな発想や発見があるかもしれないと考えると、問題解決に取り組むことってスゴクワクワクするでしょ。

②2

これまでのグループワークの中で、ボランティア活動に携わっていくためには、何かきっかけがなければ中々アクションを起こすことができないのではないかという意見がよく上がっていた。大倉さんは阪神淡路大震災をきっかけに今の事業に携わるようになった、ということだったため、きっかけはいつどこに生じるか、或いはもう既にあるかといったことは分からないと改めて感じた。また、大隅は公共交通機関が乏しく支援を継続して受けることが難しい環境が生み出されている、ということも私にない視点だった。もっと視野を広げて物事を考えなくてはいけないということを感じた。

大倉さんの話を聞きながら、「大事なことは〇〇」「すべきことは〇〇」といったように断言されることが多いと感じた。それは、大倉さんがこれまでおせっかいを通してその人の人生の登場人物としてストーリーに入り込み、その人にとって必要不可欠な存在となってきた経験が強い説得力を持たせていると考えた。中でも最も印象に残ったのは、自発性パラドックスについて「常に一人称で考えてしまう」というように述べられたことだった。自分軸になって動くことによって自己満足に終わってしまうことがあるということ、「こういった人々にこういった支援がしたい」という志を持っておくことが大切だと感じた。

お話ししたように、自発性パラドックスに陥る大きな原因は、「相手の方のことを考えていたのが、いつの間にか主役が自分になっている」ということです。「常に相手の方のことを考える」というのを忘れてはいけません。その方のストーリーの中では、私たちはただの脇役です。役名も必要のない脇役です。なので、その方たちにとって「私たちが必要不可欠な存在」と思ったことはありません。そういったことも自発性パラドックスに陥ってしまう原因になってしまいます。「そういえば最近見ないなあ」というくらいがちょうどいいのかなあ、なんて思ってます。

②③

おせっかいの連続が結果的に不登校の人たちを救うことを講義のスライドを通して理解できた。また、積極的に関わろうとするのではなく、その場その場にいるだけでも心のより所となりえることも知ることができた。

きっと始めは「本当にうっとうしい!」「もう来るな!」とか思ってたんだろうけど、その時の気持ちを後になって聞いたりはしないようにしています。その時の気持ちも本当だし、今は心のより所として考えてくれているのも本当だと思うからです。おせっかいでもなんでも大切なのは、「その人の心の中に立ち入ることはあってもデリカシーのないことはしない」ということです。

②④

京都は基盤の目状で交通の便が良かったが、大隅地域は電車が無くコミュニティバスは高齢者を対象としていたため、就労支援の人たちは対象外になってしまう現状があった、というお話で、普段から一時間に二本程度のバスしか通っていない地域に住んでいるので、交通の便が悪いというのは当たり前だと感じていましたため、自分の中にあるフィルターを感じました。

また、まずは支援するという考えを頭から消す。なぜなら、引きこもりの人たちは初めから相談者ではないから。自分の気持ちを簡単に発信できない人との関係性の構築は、おせっかいを続けながら、時間をかけて少しずつ歩み寄ることが大切。そして、やっと相談者と支援者という関係性が出来上がる。という考えは実際に支援している人しか経験として得ることができないように感じて、とても有意義でした。

ご自身の育った環境やこれまでの経験が、仕事など様々な場面で必ず活かされるときが来ます。こういった講義含めて、すべての知見や出会いは財産だと思い、さらに有意義な日々を過ごしてください。

②⑤

大倉さんのお話を聞いて、考えたことは大きく分けて二つある。一つ目は、法律や制度を知っておくことの重要性である。大倉さんのお話の中で法律や制度の内容がたくさん出てきた。大倉さんの活動のきっかけとなった阪神淡路大震災は、国の制度が機能していなかったことによって本来なら生活保護対象であるのに、対象とならないということがあった。また小泉政権の規制緩和も影響を与えたというお話もあった。福祉分野に携わる上で、なぜその問題が起きているのかという原因と背景を理解する上で、制度や法律をくわしく知っておくことは重要だと分かった。二つ目は、大きな視点をもつことだ。大倉さんは組織の立ち上げとして人材育成よりも地域づくりという意識のもと、色々な人が立ち寄れる場所の整備を進めていた。また、「おせっかい」というアプローチ方法については、おせっかい自体は悪いことを言っているのではなく、受け手のタイミングによってとらえ方が変わるだけでその方が聞いてくれるまであきらめず続けることが大切ということが印象に残っている。活動をする上で、地域全体で支えるという大きな視点と、その方のペースに合わせて、長い目で継続的に関わるということが重要であると感じた。

日本の福祉制度の整備は先進国の中でもずば抜けています。それにもかかわらず、母子世帯の貧困率や若者の自殺率が高いのはなぜでしょうか？ 日本は福祉分野において資格取得率が高いにもかかわらず、慢性的に人材不足が嘆かれているのはなぜでしょうか？ 制度に問題があるのか？ 制度がちゃんと運用されていないのか？ 制度を利用するための要件に問題があるのか？ 制度に隙

間が生じているのか？ そもそも、その課題に対応できる制度がないのか？ 法や制度を詳しく知ることによって自ずと見えてくるものがありますよ。

②6

大倉さんの話す声やトーンがとても優しく、一時間が本当にあつという間だった。

特に、私が質問していた内容と重なる疑問についてもお答えしてくださったおかげで、自分が感じていた疑問「訪問を拒絶された時のアプローチ方法は？」を解消することができた。おせっかいはタイミング次第だから、諦めず一人の人間として普通にに関わり続けるだけというお話が強く印象に残っている。

また、復学だけが全てではないという言葉とその理由にも、大変納得させられた。自分を大切に「尊厳の回復」と、生きる権利を実感する「権利の回復」を本人たちにしっかりと持ってもらうことが真の目的である、ということは、私たち自身も忘れてはいけないことだと感じた。

専門性を大切にしつつも、それ以上に関係性を大切にしていくことが、一人で不安を抱えていたり、相談する一歩を踏み出せずにいる人を救う一番の近道だということを心に留めてこれからは生活していきたい。

あなたが一番大切にしているご友人はどのような人なのでしょう？ あなたがそのご友人を一番大切と思う理由は何なのでしょう？ 「相談したい、頼りたい」と思える人というのは、支援者や専門家として立派な人である必要はありませんでしょ？ 「なんだか落ち着く、いつもツライときに黙って話を聴いてくれる、私のことを大切にしてくれる」きっと、そのような感じの人なのではないでしょうか。支援者や専門家である前に、私はいつもそういったことを考えています。

②7

大倉さんは、学生時代の頃から阪神淡路大震災での経験を通して、自分の無力さを感じ、悩みを抱える人に対し強い問題意識を持っていらっしゃった。その後、社会人になってからも、悩める労働者を助けたいという思いから自ら行動を起こされていた。このように、大倉さんのお話を伺っていると、自分よりも誰かの心配が先立っているように感じ、簡単には真似できることではないと思った。私は、余裕がなくなると周りのことしか見えなくなってしまうが、自発性パラドックスに陥らないためにも、必ず誰かを意識するということが大切にしていきたい。また、お話の中で度々「おせっかい」というワードが頻出したが、「おせっかい」をきっかけに、孤独・孤立を感じている人の中の新たな登場人物になれるという言葉には、大変納得した。私は、悩みを抱える人に対する接し方をあまりにも難しく考えすぎていたのかもしれない。大倉さんがおっしゃっていたように、専門的なことよりも、まずは時間をかけて歩み寄り、その人の居場所をつくってあげることが大きな第一歩になるのだと考えさせられた。

先日、フリースクールに通う生徒からこんなことを言われました。「訪問当初はうっとうしい！と思ってたけど、学校に行かなくなった半年間は感情のない人形みたいだったのに、先生が訪問するようになって久しぶりに感情が込み上げてきて思ってることを全部吐き出せた」と。彼はずっと溜め込んでた不満を何年もさかのぼって話してくれました。悩みごとや困りごとを抱えておられる方や生きづらさを抱えておられる方の多くは、必ず何かに我慢して生きておられます。災害時に被災された方たちもそうでした。支援や助けるということの前に、まずは、その方のお話をゆっくりしっかり聴いてあげるところからだと思っています。そのような居場所ができるといいですね。

⑳

今回の講義で最も印象に残っているのは、多くの学生からも疑問があがった「なぜおせっかいというマイナスな印象の言葉を使うのか」ということに対する講師の回答だった。こちらから一方的に話を伺いに行っている間は、相手は相談者ではなくあくまでこちらのおせっかいであるという考え方である。このような下手からの姿勢というのは、とくにボランティアのような活動において重要だと思う。いくら好意からの活動であっても恩着せがましい態度では、助けられる側もあまりいい気はしないだろう。その結果、活動の仕方を非難され、活動者もモチベーションを失ってしまったりと誰にとっても良いことはなくなる。謙虚な姿勢こそが活動を長持ちさせる秘訣なのかもしれない。

理念や信念がいつの間にか気づかないうちに自己主張となってしまうと活動がうまく進められなくなっちゃいますね。自分たちの活動を周知することは大切ですが、そこに自我を込めてしまうとこれまで共感してくださっていた方たちが離れていってしまうこともあります。まだまだ私も日々精進。「傲りを持たず謙虚であれ」を胸にこれからも頑張ります。

㉑

今回の話を聞いてとても印象に残ったのは大倉さんが勉強熱心だということである。政策や法律についても知識があって、これまで働いてきた中での考えや目の当たりにしてきた現実も生かしながら、ただ理想を言うのではなく、そこにある現実と向き合って勉強しながら物事を考えているように感じた。また、こういった支援に立つ人は行政に批判的な傾向があるのではないかという偏見があったが、それについても大倉さんは単なる批判ではなく様々な課題を抱えている人が多すぎて窓口だけでは対応できないという現実を理解した上で、コーディネイト役が必要として自分で活動を行っており、ただ不満を言うのではなく、自分で考えて学んで自分で行動していることが非常に印象的であり、当たり前に必要なことだが多くの人ができることをしていると思った。

また、引きこもりや不登校について、しばしばゴールが復学に置かれることに少し疑問を感じていたが、大倉さんはそれについて、復学が絶対いいというわけではなく、自分で将来を考えられるようになることが重要だと言っていた点に非常に共感した。私も多くの人たちが、自分のために自分がしたい選択をできることが重要であり、その選択する機会が理不尽に狭められない、狭められたとしても再びチャンスが与えられるような社会が必要だと考える。そして、実際にそれを行動にうつしているのがPS支援機構なのではないかと今回の講義を通して感じた。

私たちの活動は、制度の中で事業そのものを受託しているのがありますが、基本的には「制度の狭間支援」「制度の後方支援」となります。それができるのは、行政が制度運用をしっかりとしてくれているからです。そこが中途半端な運用だと、狭間が曖昧になり、何をどのように后方支援しているのか見えてこなくなります。そこで大切なのは、いかに行政と連携できるかということ。お互い顔が見える関係で同じ方向性を向いていれば、より良い支援につながると私は考えています。

様々な社会資源が手を取り合い、誰も取りこぼすことのないようなセーフティネットをつくることができれば、たとえどのような困難課題を抱えていたとしても、何度でもそこでチャレンジできるようになると思いませんか？

㉒

引きこもり支援や不登校支援をするときは、専門知識などのソフト面も大事だがハード面を整備

することが大事だと聞き驚きました。特に保健所や生活保護の職員から相談を受けることがあるということは知りませんでした。企業や社会福祉法人、NPO 法人の求人を見ても資格がある人の募集しているのを見て、漠然と専門知識が1番大事だと思いこんでいたのかもしれませんが。よく考えてみれば抱えている悩みやその解決方法、求めていることは個人によるのに、専門知識があるだけですぐ支援ができると考えるのはおかしいと感じました。個人の社会参加を後押しするなら、その人を社会に送り出すという視点だけで無く、社会の方から個人を迎え入れる、市民によるおせっかいの視点があっても良いのだと思いました。そのためのまちづくりが必要なのだと感じました。また、訪問拒絶をされたときも心理的な知識が必要なのだと思っていたのですが、タイミングによるもので、難しく考える必要がないというのも印象的でした。人を支援するというのに正解はないからこそ、専門性が無くても私たちにできることはたくさんあるのだと気付きました。もちろん専門性は必要ですが、専門性の有無によって支援する側が分断されないようにすることも考えるべきなのだと感じました。

縦割り行政とかよく聞かれると思いますが、それはけっして悪い意味だけでなく、それだけ日本の行政は専門性がしっかりしているということなのです。諸外国では社会福祉士などの専門職を民間が担っていることが多いのですが、日本では公的サービスとして無償で提供されています。しかし、その公的サービスは法・制度のもとで運用しなければなりません。そこで、支援する側だけでなく支援対象の方も分断されないように、国では重層的支援体制整備事業というのを現在進めています。市町村における既存の公的サービスを活かしつつ、地域住民の複雑・複合化したニーズに対応するため、民間含めた様々な社会資源と連携しながら包括的・一体的に実施する事業です。地域共生社会をサステナビリティの視点で考えるにあたって、今後どのような重層的支援体制の構築が必要なのか、私たちも当事者の1人として考えていきたいですね。